タイトル：2024 年度研究セミナー（第 25 回）
日時：2024 年 12 月 20 日（金）～21 日（土）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「ポスト・モンゴル期イランのメシア主義に関する新たな眺望：新出史料『マフディーの書』の分析から」
角田哲朗（京都大学大学院文学研究科博士課程）

この度はセミナーに参加する機会を頂戴し、発表 1 時間＋質疑 1 時間という濃密なフィードバックの時間を過ごすことができました。来年度に博士論文を提出予定の私は、先行研究のレビューと序論の構成を除いた大部分の構想が固まっている段階での発表であり、博士論文の最終章に当たる試論をタイミングよく、出来立てホヤホヤの状態で発表できました。1 時間に及ぶ発表を行い、その上、たっぷりとしたフィードバックも頂戴できる機会は限られており、大変ありがたい限りでした。私の報告は、15 世紀のメシア主義者らの相互認識を、新資料に基づいて論じるものでした。史料そのものの来歴といった史料論という（私にとって）挑戦的な発表でしたが、先生方との質疑応答を通して、試論の輪郭がより鮮明になったと実感しました。とりわけ、原典史料のワクフ印に関する報告者の雑な処理に対する高松洋一先生からのお叱りは大変示唆に富むものであり、報告者の事前提出資料を読み込んで、ワクフ印ひとつから判明する数多くの情報量を指摘された高松先生の後進指導の姿勢には深い感銘を受けました。

更に、神田先生による博士論文執筆に関する経験談のレクチャーからも、数年単位でキャリアを構想する周到さや、計画が破綻した際の立て直しの精神など、私から欠けていた視点を伺うことができ、襟を正す思いとなりました。また、私は遠方からの参加ということで、旅費を負担頂きました。経済的な問題で、遠方開催の研究会には二の足を踏みがちなところ、迷うことなく参加を申し込む一因であったことは間違いありません。こうした学生支援という側面も是非、継続頂ければ、大変ありがたいです。前年までのオンライン研究会も参加しやすいという側面は確かにありましたが、対面での長丁場での報告と質疑応答に優る経験はないと思っています。

最後に、セミナーを主催してくださった先生方およびスタッフの皆様、そして活発な議論を交わしてくださった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。本セミナーに参加することで、研究意欲がさらに深まり、博士論文完成への推進力を得ることができました。立派な博士論文を提出したいと思います！